

小沼純一

置き換えられない技術

「ほんとに、あんなに速く、指が動いていたんですね。おどろきです」

4月から5月にかけての連休、安価で多くのコンサートを楽しめる「ラ・フォル・ジュルネ（熱狂の日）」という催しが、東京国際フォーラムを中心に行われる。普段、生演奏に触れることのない人たちも大勢やってきて、大にぎわい。そのさまを取材した新聞記者が、インタビューした人の言葉から引いた。

人の手がやっていた多くのことをコンピューターができるようになり、それが当然になってくると、楽器の演奏も、実はスタジオで操作してできあがっているのだと思う人が出てくる。

音楽における「技術」というと、少し前まではもっぱら「人」に結びついてきた。作曲や編曲の技術、演奏の技術、あるいは楽器製作の技術、というふうに。何らかの伝統なり規範なりがあって、それに則<sup>したが</sup>ったかたちでの技術がある。技術を知っていれば、手にしていれば、それを使わないでいることもできる。音楽に限らない。格闘技や科学だって同じだ。知ることは危機管理にもつながる。

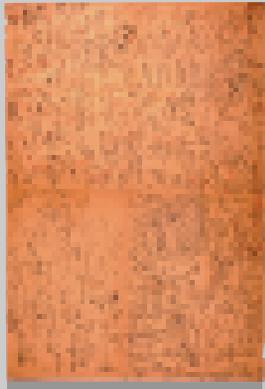
指が速く動く。高度な技術を要する曲が演奏できる。そうしたことが音楽家個人への賛嘆にもつながった。ヴィルトゥオーゾ（芸術的に優れた人、名手）の時代と呼ばれるヨーロッパの19世紀は、大衆的な見世物が流行した時代でもあった。

コンピューターで多くのことができるようになってくると、そもそも人がなぜそんなことをしなくてはならないのかという疑問が生まれるようになった。無理してそんなに速く指を動かす必要なんてないじゃない、と。

オーケストラを響かせる技術も、シミュレーションソフトで何とかなる。過去に積み重ね



こぬま・じゅんいち……1959年、東京生まれ。早稲田大学文学部教授。音楽文化論。音・音楽に関連する諸分野に関心をもつ。著書に『サウンド・エッセイ』(平凡社新書)、『バッハ「ゴルトベルク変奏曲」世界・音楽・メディア』(みすず書房)、『武満徹 その音楽地図』(PHP新書)ほか多数。2006年11月に12年ぶりの詩集『サイゴンのシド・チャリシー』(書肆山田)刊。



表紙©南方熊楠の腹稿  
所蔵 = 南方熊楠顕彰館

## C o n t e n t s

- 2 技術に会う 7  
置き換えられない技術 小沼純一
- 4 HITACHI FILE talk+
  - 1 バラスト水による生態系破壊を防ぐ切り札が日立に!  
望月明／鈴木朋子
  - 2 「現場のIT化」を実現する  
アクティブRFID無線ネットワーク  
木下泰三
  - 3 なにわのシンボル  
通天閣50周年を彩る、黄金の輝き  
西川孝／大居弘明
- 10 特集 巨樹の語るもの——森、人、環境……
  - 11 巨樹と文明の物語 安田喜憲
  - 13 巨樹図鑑
  - 16 巨樹はいかに巨樹になるか  
——巨樹の生態学 湯浅浩史
  - 20 日立の樹の話
  - 21 「森へ」 石川直樹
  - 24 かつてカナダ北極圏に巨樹の森があった!  
——根株が語る5500万年前の地球  
川上紳一
- 26 technobscure 7  
石塚元太良「www」
- 28 永瀬唯のサイエンス・パースペクティブ 7  
洗濯機——「洗うマシン」の進化論
- 33 ダントツさんが行く! 6  
ジャー炊飯器
- 34 技術の日立 今昔 3  
シヨベル

られた多くの作品から学んで、フルートとホルンを重ねると調和するとか、音響学上の効果を経験から得るとか、そうしたものも必要ないというわけだろう。

学生が言うのである。クラシックの録音というのは、どうしてあんなにリヴァーブ（残響）がかかっているのか。最近の音楽は部屋のステレオやヘッドホンで聴くのを前提としているから、もっとデッドな音になっている。それに慣れているから、リヴァーブだけでこのジャンルが苦手だと感じてしまうのだ、と。

コンサートホールなどで楽器が響く音を実際に体験したことがないと、たいていの音は乾いているのだと思ってしまう。残響があるなかで音が響いて、音楽が立体的になるという空間性にとっつきにくい。

技術というのは、たった一つの時間軸のうえで成り立つのではないし、確実に進歩・発展していくものでもない。そのときどきで最高の技術があっても、次世代では無意味、無価値にみなされてしまうこともある。ひとたび洗練された技術は、忘れられるようになったらあっという間で、容易に取り戻せなくなる。二度と手にできないことだってある。だが、音楽における「技術」、それは、ただ何かを実現するためではなく、その実現のプロセスが心身に快楽をもたらすからこそ、そのものだ。

技術は進んでいる。それは確かだ。とはいえ、それに伴う何らかの代償もけつして小さくはない。

Antonio Stradivari Cremona 1717 "Nightingale"  
©Shinichi Yokoyama

